

第3章 体育教師教育プログラムに対する大学生の意識

第1節 質問紙調査による教育実習生の意識の実態把握

日野克博 刈谷三郎

I 研究の目的

今日の学校では、体力・運動能力の低下など様々な問題が生じており、それらに対応していくためには教員としての資質能力の向上や実践的力量的形成が強く求められている。体育教師の実践的力量的は、教員養成・教員採用・現職研修という各段階を経ながら形成されていく。なかでも、教員養成段階、とりわけ、教育実習は体育教師に必要な実践的力量的の基礎を形成するうえで重要な役割を果たすものである。

しかし、教育実習での指導の多くが実習校に委ねられている場合が少なくない。教育実習において、教育実習生が体育科の授業を教えることをどのように学んでいるか、さらにはどのような指導の必要性を感じているかという意識の実態は十分把握されていないと思われる。また、各大学での教育実習の改善は進められているものの、複数の大学から一般的な傾向を検証しているものは少ない。まずは、教育実習生の意識の実態把握から、実践的力量的を形成する上での課題を検証することは意義深いと考えた。

そこで本研究では、小学校並びに中学校の教育実習に参加した学生を対象に質問紙調査を実施し、次の3点について検討することにした。

- 1) 教育実習での体育指導の実態
- 2) 教育実習前後の教育実習生の意識変容
- 3) 教育実習生からみた教員養成での指導の必要性

1) については、教育実習では、教科指導だけでなく生活指導、学級経営、学校行事など多くのことを学習している。そのなかで、教育実習を通して体育科の指導にあたってどのくらいの経験を重ねているのか、その実態を把握することにした。2) については、教育実習の前後に同一の質問紙を用いて調査を行い、学生が抱く体育科の指導に関する心配が教育実習を経験することでどのように変化するかを把握することにした。3) については、教育実習を経験したことから感じた教育実習前に大学で指導してほしい内容について、教育実習生の意識を把握することにした。

これらの調査を通して、実践的力量的を形成する体育教師教育プログラム開発のための基礎資料を得ることが本研究の目的である。教員養成段階では、大学と実習校との連携は不可欠である。両者の連携は、教育実習における実習生への指導内容と教育実習前後の大学における授業の双方において合意を作ることであり、本研究の結果は、これらの連携の改善や今後の体育教師教育プログラムの開発において有効な示唆を与えるものと思われる。

なお、教育実習は、小学校、中学校、高等学校など各発達段階において実施されており、実施期間や実施校（附属校、一般校、出身校等）などによっても意識の差はあると考えられる。本研究では基本的に教員養成系大学・学部における附属学校での教育実習を対象とすることにした。

II 研究の方法

1. 調査項目の設定

本調査で適用した調査票については、P〇～〇の資料編を参照頂きたい。

調査項目については、次のような内容で構成した。

＜研究目的1：教育実習での体育指導の実態把握＞

- ① 全教科の指導時数（小学校教育実習のみ）
- ② 体育授業の指導時数
- ③ 体育授業の指導計画
- ④ 体育授業の指導案作成
- ⑤ 体育授業の授業観察
- ⑥ 体育授業の反省会
- ⑦ 教育実習での体育に関する情報源（8項目）

＜研究目的2：教育実習前後の教育実習生の意識変容＞

- ⑧ 教職、子どもに対する意識（3項目）
- ⑨ 体育授業を教えることの心配（18項目）

＜研究目的3：教育実習生からみた教員養成での指導の必要性＞

- ⑩ 大学への講義内容の要望（13項目）

①～⑦の調査項目は、教育実習での体育科の指導に関する実態を把握するために設定した。⑧、⑨の調査項目については、教職や子どもへの意識に関する3項目と、木原ら（2002）の研究で適用していた「心配」に関する調査項目に「よい体育授業ができる」という総合的な設問を加えた18項目で構成した。⑩の調査項目については、木原ら（2004）の研究で適用していた項目に「授業改善のための方法や授業観察、授業分析の仕方」という項目を加えた18項目で構成した。

2. 調査対象

（1）小学校教育実習生への調査

2003年9月から11月にかけて、中国四国地区の大学^{注1)}での小学校教育実習に参加した学生を対象に調査を実施した。教育実習の前後の調査を通して有効な回答が得られた314名を分析対象とした。その内訳（特徴）は、表1-1～5のとおりである。

2) 中学校教育実習生への調査

2005年5月から10月にかけて、中国四国地区の大学^{注2)}での中学校教育実習に参加した学生を対象に調査を実施した。教育実習の前後の調査を通して有効な回答が得られた67名を分析対象とした。その内訳（特徴）は、表2-1～4のとおりである。

表 1-1 小学校実習生の大学

	人	(%)
A 大学	66	(21.0)
B 大学	66	(21.0)
C 大学	54	(17.2)
D 大学	50	(15.9)
E 大学	48	(15.3)
F 大学	24	(07.6)
G 大学	6	(01.9)
計	314	(100)

表 1-2 性別

	人	(%)
男子	72	(22.9)
女子	242	(77.1)

表 1-3 実習生の学年

	人	(%)
3 年生	268	(85.4)
4 年生	19	(6.1)
その他	27	(8.6)

表 1-4 教育実習の期間

	人	(%)
5 週間	48	(15.3)
4 週間	235	(74.8)
3 週間	1	(0.3)

表 1-5 配属学級

	人	(%)
低学年	108	(34.4)
中学年	108	(34.4)

2週間	30	(9.6)
-----	----	-------

高学年	98	(31.2)
-----	----	--------

	人	(%)
A 大学	23	(21.0)
B 大学	7	(21.0)
C 大学	17	(17.2)
H 大学	3	(15.9)
E 大学	5	(15.3)
I 大学	5	(7.6)
J 大学	7	(1.9)
計	67	

	人	(%)
男子	32	(47.8)
女子	35	(52.2)

	人	(%)
3年生	38	(56.7)
4年生	28	(41.8)
その他	1	(1.5)

	人	(%)
5週間	5	(7.8)
4週間	49	(76.6)
2週間	10	(15.6)

3. 調査方法並びに分析方法

調査は、大学ごとに大学教員もしくは実習校担当教員を通じて学生に配布し、調査を実施した。調査の集計にあたっては、項目ごとの平均値と割合を算出した。教育実習前後の教育実習生の意識変容については、各項目の平均値の差の検定を行った。

III 結果

1. 教育実習での体育科指導の実態

(1) 小学校教育実習の実態

表 3-1、図 1-1 は、小学校教育実習で実際に指導した授業数（全教科）を尋ねたものである。0 時限が 0.0%、1 時限が 2.5%、2 時限が 1.9%、3～4 時限が 27.1%、5 時限以上が 68.5% で、教育実習生の大半は何らかの授業を 3 回以上は経験していた。

表 3-2～3-6、図 1-2～1-6 は、小学校教育実習での体育科の指導に関連した「指導時数」「授業計画づくり」「学習指導案の作成」「授業観察」「授業反省会」への参加頻度を尋ねたものである（詳しい結果は図表を参照）。

これらの結果から、小学校教育実習生の約半数が体育に関して「実際に指導していない」（57.3%）、「計画づくりに参加していない」（53.6%）、「指導案を作成していない」（57.5%）、「反省会に参加していない」（44.8%）といった実態が明らかになった。教育実習は、実際に学校現場に足を踏み入れ、その経験を通じて実践的力量を形成する場でもある。しかし、1 つの教科である体育に焦点をあててみると、必ずしも実践的力量を形成するための十分な経験が保障されていない。小学校の場合、全ての教科を行うこと、また、附属校の教育実習には 1 つの学級に複数の実習生が配属されることなどが関係していると思われる。他教科の実態を把握していないので一概には言えないが、それでも教育実習中に 1 度も体育の指導を経験していない実習生が半数以上いることや、授

業を行っても1回もしくは2回であり、自らの実践を省察し、実践的力を高めていくための経験になっていないこと、授業実践だけでなく指導案の作成や反省会への参加など体育授業を構想したり、省察する力を育むための経験が十分保証されていないなど、体育に関する指導経験は十分とは言い難い。こうした現状を踏まえて、実践的力を形成していくための教育実習の改善や大学授業との連携の強化が求められる。

(2) 中学校教育実習の実態

表3-2～3-6、図1-2～1-6は、中学校教育実習での保健体育科の指導に関連した「指導時数」「授業計画づくり」「学習指導案の作成」「授業観察」「授業反省会」への参加頻度を尋ねたものである（詳しい結果は図表を参照）。

中学校教育実習では、小学校教育実習と比べ「指導時数」「授業計画づくり」「指導案の作成」「授業観察」「授業反省会」の経験頻度は多くなっていた。中学校では教科担任制がとられていることから、体育に関する経験も多くなっていると考えられる。「指導時数」「授業計画」「指導案の作成」では4～6回の割合が多く、「授業観察」「授業反省会」では10回以上の割合が多くなっていた。これは、授業を実際に指導する経験とともに、他の実習生の授業を観察したり、授業反省会に参加して授業を省察する経験も大切にされていることが推察される。実際にどのくらいの経験が保障されればよいかについてはまだこれから検討が必要だが、今回の結果を一つの指標として、さらに教育実習の具体的な指導内容や実践的力の形成過程を詳細に分析していく必要がある。

表 3-1 小学校教育実習での指導時数（全教科）

	人	(%)
0 時限	0	(0.0)
1 時限	8	(2.5)
2 時限	6	(1.9)
3～4 時限	85	(27.1)
5 時限以上	215	(68.5)

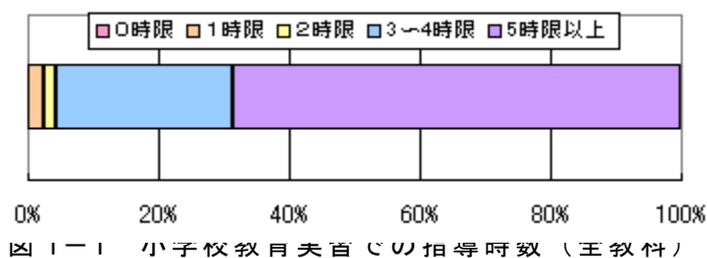


表 3-2 小学校教育実習での指導時数（体育）

	人	(%)
0 時限	180	(57.3)
1 時限	89	(28.3)
2 時限	32	(10.2)
3～4 時限	6	(1.9)
5 時限以上	7	(2.2)

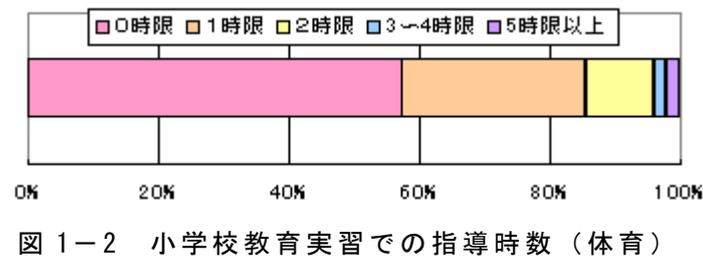


表 3-3 小学校教育実習での
指導計画への参加

	人	(%)
0 時限	164	(53.6)
1 時限	79	(25.8)
2 時限	19	(6.2)
3～4 時限	15	(4.9)
5 時限以上	29	(9.5)

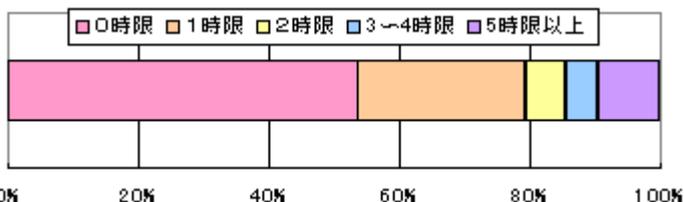


図 1-3 小学校教育実習での指導計画への参加

表 3-4 小学校教育実習での
体育科指導案の作成

	人	(%)
0 時限	176	(57.5)
1 時限	96	(31.4)
2 時限	21	(6.9)
3～4 時限	7	(2.3)
5 時限以上	6	(2.0)

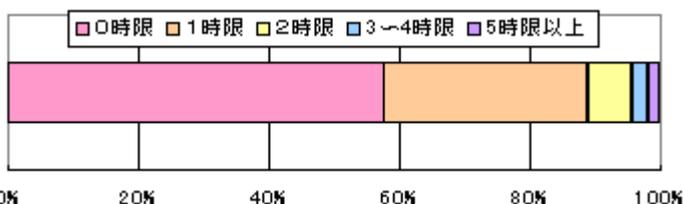


図 1-4 小学校教育実習での体育科指導案の作成

表 3-5 小学校教育実習での
体育授業の観察

	人	(%)
0 時限	27	(8.9)
1 時限	32	(10.5)
2 時限	42	(13.8)
3～4 時限	57	(18.7)
5 時限以上	147	(48.2)

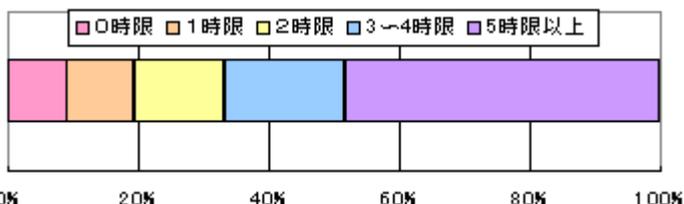


図 1-5 小学校教育実習での体育授業の観察

表 3-6 小学校教育実習での
体育授業の反省会

	人	(%)
0 時限	137	(44.8)
1 時限	66	(21.6)
2 時限	34	(11.1)
3～4 時限	44	(14.4)
5 時限以上	25	(8.2)

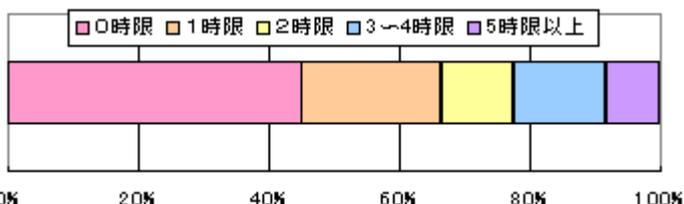


図 1-6 小学校教育実習での体育の反省会

表 4-1 中学校教育実習で
の保健体育の指導時数

	人	(%)
0 時限	0	(0.0)
1～3 時限	4	(6.3)
4～6 時限	26	(40.6)
7～9 時限	18	(28.1)
10 時限以上	16	(25.0)

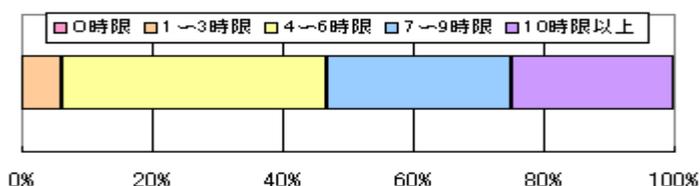


図 2-1 中学校教育実習での保健体育の指導時数

表 4-2 中学校教育実習での指導計画への参加

	人	(%)
0 時限	0	(0.0)
1～3 時限	7	(11.1)
4～6 時限	36	(57.1)
7～9 時限	11	(17.5)
10 時限以上	9	(14.3)

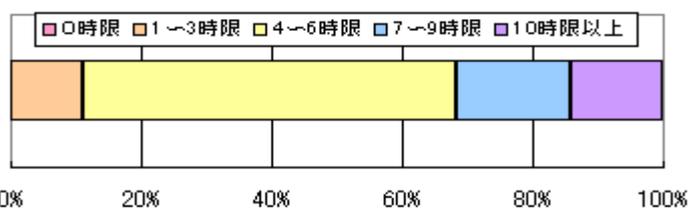


図 2-2 中学校教育実習での指導計画への参加

表 4-3 中学校教育実習での学習指導案の作成

	人	(%)
0 時限	0	(0.0)
1～3 時限	15	(23.4)
4～6 時限	33	(51.6)
7～9 時限	9	(14.1)
10 時限以上	7	(10.9)

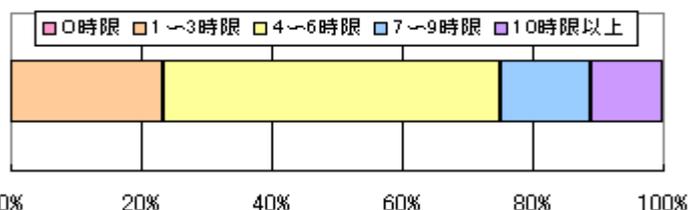


図 2-3 中学校教育実習での保健体育科指導案の作成

表 4-4 中学校教育実習での体育授業の授業観察

	人	(%)
0 時限	0	(0.0)
1～3 時限	1	(1.6)
4～6 時限	3	(4.7)
7～9 時限	12	(18.8)
10 時限以上	48	(75.0)

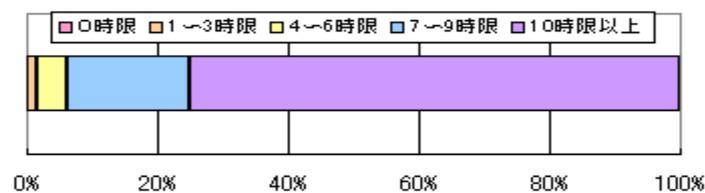


図 2-4 中学校教育実習での保健体育の授業観察

表 4-4 中学校教育実習での反省会への参加

	人	(%)
0 時限	0	(0.0)
1～3 時限	10	(15.9)
4～6 時限	12	(19.0)
7～9 時限	13	(20.6)
10 時限以上	28	(44.4)

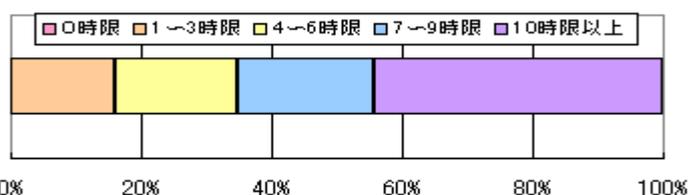


図 2-5 中学校教育実習での授業反省会への参加

3) 教育実習での体育に関する情報源の実態

表 5-1、5-2 は、教育実習での体育指導にあたって、授業計画や授業実践の際に活用したり、参考にした情報源（助言やアドバイスも含む）として、各項目はどの程度役立ったかを 5 段階評定法で尋ねたものである。小学校教育実習で最も役立った情報源は、「配属学級の指導教員」（4.23）で、以下「配属学級以外の教員」（3.77）、「他の教育実習生」（3.53）、「大学の講義や実技の授業」（3.50）

と続いている。「自分自身のスポーツ経験」(3.30)や「小学校での体育授業の経験」(3.18)よりも「大学の講義や実技の授業」の方が役立つ情報源になっているが、「大学の教員」(3.18)は他と比べて低くなっていた。一方、中学校教育実習で最も役立つ情報源は、「保健体育の指導教員」(4.83)で、以下「他の教育実習生」(4.58)、「体育雑誌や体育専門書」(4.23)、「自分自身のスポーツ経験」(4.06)と続いている。「大学の教員」(3.95)と「大学での講義や実技の授業」(3.95)は、同じ程度の情報源と受け止められていた。これらの結果から、小学校教育実習と中学校教育実習ともに、指導教員が最も役立つ情報源となっており、次いで他の教育実習生が高くなっていた。直接指導

表 5-1. 小学校教育実習での体育に関する情報源

	平均	(SD)
(1) 配属学級の指導教員	4.23	(1.1)
(2) 配属学級以外の教員	3.77	(1.2)
(3) 大学の教員	3.18	(1.1)
(4) 大学の講義や実技の授業	3.50	(1.1)
(5) 体育雑誌や体育専門書	3.20	(1.1)
(6) 小学校の体育授業の経験	3.18	(1.0)
(7) 自分自身のスポーツ経験	3.30	(1.1)
(8) 他の教育実習生	3.53	(1.1)

表 5-2. 中学校教育実習での体育に関する情報源

	平均	(SD)
(1) 保健体育の指導教員	4.83	(0.5)
(2) 保健体育以外の教員	2.89	(1.4)
(3) 大学の教員	3.95	(1.2)
(4) 大学の講義や実技の授業	3.95	(1.0)
(5) 体育雑誌や体育専門書	4.23	(1.1)
(6) 中学校の体育授業の経験	3.19	(1.3)
(7) 自分自身のスポーツ経験	4.06	(1.1)
(8) 他の教育実習生	4.58	(0.7)

を与えたり、助言やアドバイスをする指導教員や同僚の実習生の役割が教育実習では重要になってくる。一方、小学校と中学校で大きく異なったのが、「大学の教員」と「体育雑誌や体育専門書」であった。小学校教育実習では、体育指導する機会が少なかったこともあるが、教材研究や教材づくりの情報源となる体育雑誌や体育専門書の活用の仕方や大学教員の関与の仕方が今後の課題といえる。

2. 教育実習前後の教育実習生の意識変容

(1) 小学校教育実習生の意識変容

表 6-1 は、小学校教育実習前後での「教職への意識(教師になりたいか)」「教師としての適性(教師に向いているか)」「子どもとの関わり(上手く子どもと関われるか)」を尋ねたものである。これらの項目での実習前後の有意な差は認められなかった。

表 6-2、図 3-1 は、教育実習前後の体育授業を教えることの心配について尋ねたものである。教育実習前の段階で心配の高かった項目は、「F. 模範を示せない種目の指導」(4.26)、「G. 一人ひとりの子ども把握」(4.11)、「P. 運動技能の指導」(4.01)で、教育実習後に心配の高かった項目は、「G. 一人ひとりの子ども把握」(4.26)、「運動の苦手な子への配慮」(4.16)、「A. 安全」(4.11)であった。そして、教育実習前後で心配が有意に増大した項目は、「A. 安全」「B. 運

動の苦手な子への配慮」「G.一人ひとりの子ども把握」「N.子ども同士の協力的関係」「Q.いろいろな子どものニーズ」であった。

表 6-1 教育実習生の教職に対する意識の変容（小学校教育実習生）

項目	実習前		実習後		t 検定
	平均	(SD)	平均	(SD)	
1. 教師になりたいと思っている	4.00	(1.11)	4.06	(1.10)	1.38
2. 教師に向いていると思う	2.98	(0.91)	3.02	(0.94)	0.80
3. 上手く子どもと関わることができる	3.41	(0.82)	3.50	(0.86)	1.72

表 6-2 体育授業を教えることの心配の変容（小学校教育実習生）

	実習前		実習後		t 検定
	平均	(SD)	平均	(SD)	
A. 子どもが安全に運動できる	3.90	(1.00)	4.11	(0.96)	3.36 ***
B. 運動の苦手な子どもへの配慮ができる	3.90	(0.96)	4.16	(0.95)	4.41 ***
C. どの運動を教えるべきかを理解している	3.74	(0.95)	3.74	(0.91)	0.16
D. 学校の体育にかかわる行事予定を理解している	3.23	(0.99)	3.00	(1.01)	-2.86 **
E. 子どもが私の授業を好意的に評価してくれる	3.95	(0.90)	3.66	(0.97)	-4.13 ***
F. 自分が模範を示せない種目の運動を教える	4.26	(1.04)	4.10	(1.05)	-2.60 **
G. 授業中に一人一人の子どもを把握できる	4.11	(0.88)	4.26	(0.90)	2.47 *
H. 子どもの行動をコントロールできる	3.94	(0.89)	3.96	(0.93)	0.15
I. 今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう	2.99	(0.95)	3.03	(1.06)	0.65
J. 子どもたちの運動のつまずきを診断できる	3.83	(0.89)	3.88	(0.93)	0.90
K. 体育用具の準備や体育施設の管理ができる	2.87	(1.00)	2.96	(0.98)	1.53
L. 教師に認められ受け入れられる	3.76	(0.94)	3.38	(1.02)	-6.10 ***
M. 各種目に必要な運動技能を指導できる	3.99	(0.94)	4.01	(0.91)	0.29
N. 子ども同士の協力的な関係をつくる	3.31	(1.00)	3.64	(1.03)	4.48 ***
O. 学校の教員の前でうまく行動する	3.60	(1.03)	3.29	(1.08)	-4.90 ***
P. 運動技能を向上させる指導ができる	4.01	(0.88)	4.02	(0.85)	0.12
Q. いろいろな子どもたちのニーズに合わせる	3.81	(0.94)	3.98	(0.87)	2.66 **
R. よい体育授業ができる	4.21	(0.85)	4.12	(0.88)	-1.42

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

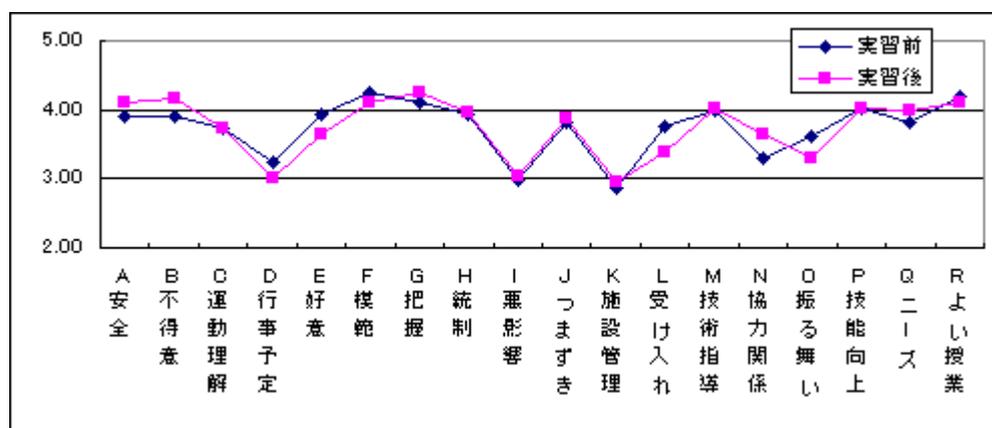


図 3-1 体育授業を教えることの心配の変容（小学校教育実習生）

一方、教育実習前の段階で心配の低かった項目は、「K.施設管理」(2.87)、「I.子どもへの悪影響」(2.99)、「D.行事理解」(3.23)で、教育実習後も同様に「K.施設管理」(2.96)、「I.子どもへの悪影響」(3.03)、「D.行事理解」(3.00)の項目が低くなっていた。そして、教育実習前後で心配が有意に低下した項目は、「D.行事理解」「E.子どもの好意的評価」「F.模範を示せない種目の指導」「L.教師としての受け入れ」「O.教員の前での行動」であった。

(2) 中学校教育実習生の意識変容

表 6-3 は、中学校教育実習前後での「教職への意識(教師になりたいか)」「教師としての適性(教師に向いているか)」「子どもとの関わり(上手く子どもと関われるか)」を尋ねたものであるが、どの項目も教育実習後の数値が高くなっており、とくに「子どもとの関わり」において 1%水準で有意な差が認められた。

表 6-4、図 3-2 は、中学校教育実習前後の体育授業を教えることへの心配について尋ねたものである。教育実習前の段階で心配の高かった項目は「G.一人ひとりの子ども把握」(4.09)、「B.運動の苦手な子への配慮」(3.94)、「F.模範を示せない種目の指導」(3.84)で、教育実習後に心配の高かった項目も「G.一人ひとりの子ども把握」(3.95)、「運動の苦手な子への配慮」(3.94)、「F.模範を示せない種目の指導」(3.94)であった。そして、教育実習前後で心配が有意に増大した項目はみられなかった。

一方、教育実習前の段階で心配の低かった項目は、「K.施設管理」(2.46)、「I.子どもへの悪影響」(2.52)、「O.教員の前での行動」(2.91)で、教育実習後も同様に「K.施設管理」(2.41)、「I.子どもへの悪影響」(2.47)、「O.教員の前での行動」(2.62)の項目が低くなっていた。そして、教育実習前後で心配が有意に低下した項目は、「D.行事理解」のみであった。

表 6-3 教育実習生の教職に対する意識の変容(中学校教育実習生)

項目	実習前		実習後		t 検定
	平均	(SD)	平均	(SD)	
1. 教師になりたいと思っている	3.93	(1.29)	4.09	(1.22)	1.64
2. 教師に向いていると思う	3.13	(1.00)	3.34	(0.88)	1.98
3. 上手く子どもと関わるができる	3.64	(0.87)	3.94	(0.75)	3.08 **

(** P<.01)

表 6-4 体育授業を教えることへの心配の変容(中学校教育実習生)

項目	実習前		実習後		t 検定
	平均	(SD)	平均	(SD)	
A. 子どもが安全に運動できる	3.61	(1.07)	3.84	(1.07)	1.80

B. 運動の苦手な子どもへの配慮ができる	3.94	(0.95)	3.94	(0.97)	-0.41
C. どの運動を教えるべきかを理解している	3.31	(1.09)	3.22	(1.09)	-0.19
D. 学校の体育にかかわる行事予定を理解している	3.18	(1.06)	2.78	(1.00)	-2.21 *
E. 子どもが私の授業を好意的に評価してくれる	3.66	(1.07)	3.43	(1.06)	-1.36
F. 自分が模範を示せない種目の運動を教える	3.84	(1.20)	3.94	(1.15)	0.73
G. 授業中に一人一人の子どもを把握できる	4.09	(0.90)	3.95	(0.92)	-1.12
H. 子どもの行動をコントロールできる	3.78	(1.01)	3.88	(1.02)	0.72
I. 今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう	2.52	(0.96)	2.47	(1.07)	-0.22
J. 子どもたちの運動のつまづきを診断できる	3.46	(0.89)	3.38	(0.98)	-0.46
K. 体育用具の準備や体育施設の管理ができる	2.46	(0.97)	2.41	(0.94)	-0.41
L. 教師に認められ受け入れられる	3.27	(0.99)	3.02	(0.98)	-1.51
M. 各種目に必要な運動技能を指導できる	3.45	(1.08)	3.55	(1.10)	1.01
N. 子ども同士の協力的な関係をつくる	3.04	(0.94)	3.19	(1.19)	0.94
O. 学校の教員の前でうまく行動する	2.91	(1.06)	2.62	(0.93)	-1.44
P. 運動技能を向上させる指導ができる	3.40	(0.97)	3.42	(1.11)	0.37
Q. いろいろな子どもたちのニーズに合わせる	3.52	(1.04)	3.66	(0.91)	1.03
R. よい体育授業ができる	3.88	(1.07)	3.69	(0.91)	-1.37

(* P<.05)

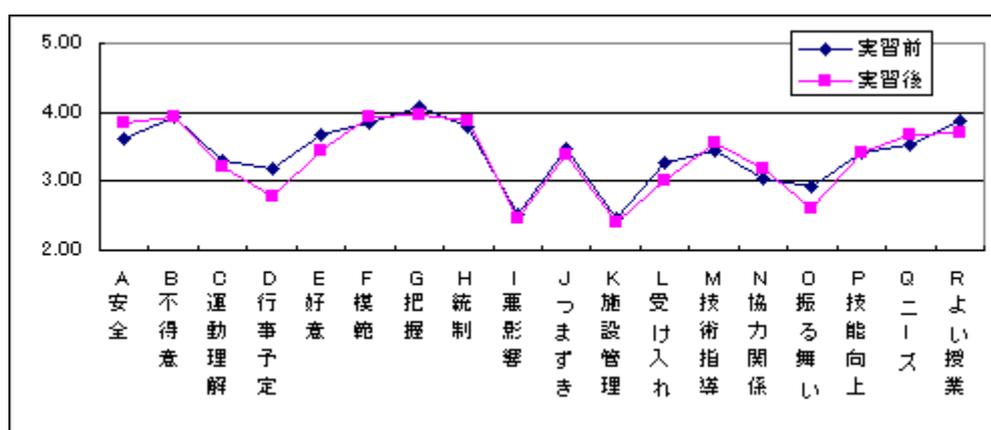


図 3-2 体育授業を教えることの心配の変容 (中学校教育実習生)

3. 教育実習生からみた大学の教員養成での指導の必要性

(1) 小学校教育実習生からみた指導の必要性

表 7-1、図 4-1 は、大学の授業での指導の必要性について教育実習を終えた段階で実習生に尋ねたものである。小学校教育実習を終えた実習生から大学授業での指導の必要性が高かった項目は、次のような項目であった。

- ・ 「運動につまづいている子やできない子への指導や助言の仕方」 (4.61)
- ・ 「体育授業における安全確保の問題」 (4.50)
- ・ 「体育授業で多くの子どもたちを把握する方法」 (4.42)
- ・ 「体育授業での個人差への対応の仕方」 (4.41)
- ・ 「子どもの主体的な学習の進め方や学び方の方法」 (4.41)

一方、実習生から大学授業での指導の必要性が他の項目より低かったのは、次

のような項目であった。

- ・ 「体育授業での教育機器（音楽やVTRなど）の利用の仕方」（3.48）
- ・ 「体育用具の準備や体育施設の管理の仕方」（3.67）
- ・ 「体育やスポーツに関する専門的な知識」（3.73）
- ・ 「運動の模範や見本を示せる実技力」（3.85）

2) 中学校教育実習生からみた指導の必要性

表 7-2、図 4-1 は、大学の授業での指導の必要性について尋ねたものである。中学校教育実習を終えた実習生から大学授業での指導の必要性が高かった項目は、次のような項目であった。

- ・ 「運動につまずいている子やできない子への指導や助言の仕方」（4.66）
- ・ 「運動の模範や見本を示せる実技力」（4.55）
- ・ 「運動技能に関する知識（運動技能の発展や段階など）」（4.50）
- ・ 「体育授業で多くの子どもたちを把握する方法」（4.48）
- ・ 「体育授業における安全確保の問題」（4.45）
- ・ 「体育やスポーツに関する専門的な知識」（4.42）
- ・ 「子どもの主体的な学習の進め方や学び方の方法」（4.41）

一方、実習生から大学授業での指導の必要性が他の項目より低かったのは、次のような項目であった。

- ・ 「体育授業での教育機器（音楽やVTRなど）の利用の仕方」（3.64）
- ・ 「体育用具の準備や体育施設の管理の仕方」（3.67）
- ・ 「体育科の目標や内容、評価などの基本的な知識」（4.08）

表 7-1 小学校教育実習生からみた大学の教員養成での指導の必要性

	平均	(SD)
(1) 運動の模範や見本を示せる実技力	3.85	(1.00)
(2) 体育科の授業計画や指導案の作成の仕方	4.16	(0.85)
(3) 体育授業における安全確保の問題	4.50	(0.68)
(4) 体育授業で多くの子どもたちを把握する方法	4.42	(0.76)
(5) 運動技能に関する知識（運動技能の発展や段階など）	4.22	(0.73)
(6) 子どもの主体的な学習の進め方や学び方の方法	4.41	(0.74)
(7) 体育授業での教育機器（音楽やVTRなど）の利用の仕方	3.48	(0.94)
(8) 運動につまずいている子やできない子への指導や助言の仕方	4.61	(0.65)
(9) 体育科の目標や内容、評価などの基本的な知識	4.09	(0.79)
(10) 体育授業での個人差への対応の仕方	4.41	(0.71)
(11) 体育用具の準備や体育施設の管理の仕方	3.64	(0.90)
(12) 体育やスポーツに関する専門的な知識	3.73	(0.91)
(13) 授業改善のための方法や授業観察、授業分析の仕方	4.12	(0.79)

表 7-2 中学校教育実習生からみた大学の教員養成での指導の必要性

	平均	(SD)
(1) 運動の模範や見本を示せる実技力	4.55	(0.71)
(2) 体育科の授業計画や指導案の作成の仕方	4.34	(0.76)
(3) 体育授業における安全確保の問題	4.45	(0.64)
(4) 体育授業で多くの子どもたちを把握する方法	4.48	(0.67)
(5) 運動技能に関する知識（運動技能の発展や段階など）	4.52	(0.73)
(6) 子どもの主体的な学習の進め方や学び方の方法	4.41	(0.71)
(7) 体育授業での教育機器（音楽やVTRなど）の利用の仕方	3.64	(1.01)
(8) 運動につまずいている子やできない子への指導や助言の仕方	4.66	(0.54)
(9) 体育科の目標や内容、評価などの基本的な知識	4.08	(0.84)
(10) 体育授業での個人差への対応の仕方	4.38	(0.75)
(11) 体育用具の準備や体育施設の管理の仕方	3.67	(0.93)
(12) 体育やスポーツに関する専門的な知識	4.42	(0.81)
(13) 授業改善のための方法や授業観察、授業分析の仕方	4.28	(0.74)

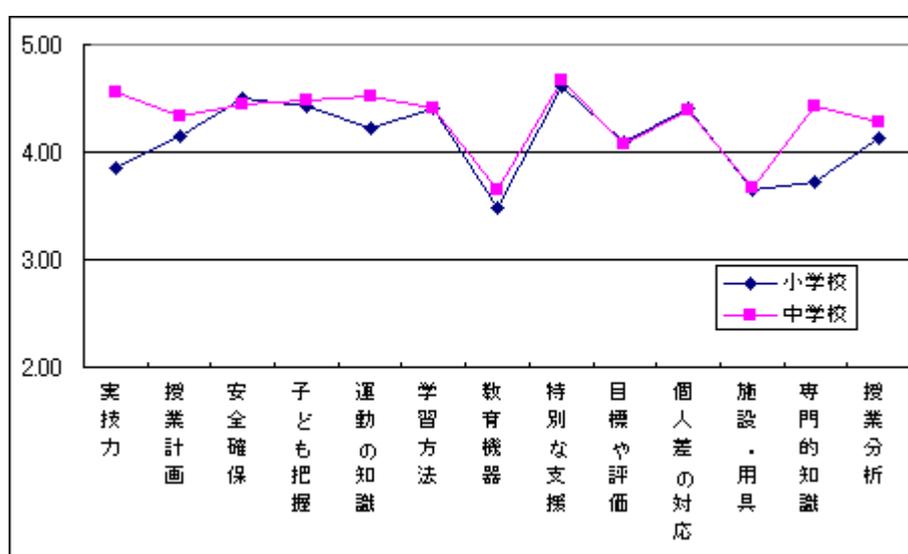


図 4-1 教育実習生からみた大学の教員養成での指導の必要性

IV 総合的考察

本研究の目的は、中国四国地区の教員養成系大学で教育実習に参加した学生を対象に質問紙調査を実施し、1) 教育実習での体育指導、2) 教育実習前後の意識変容、3) 教育実習生からみた教員養成での指導の必要性の実態を把握することであった。単純な調査ではあったものの今後の教員養成カリキュラムを改善していくための有益な情報を得ることができた。その主な点を以下にあげておく。

1) 教育実習の体育指導の実態について

- ・ 小学校教育実習生の半数は、体育に関する指導経験や授業計画づくり、指導案の作成、授業反省会を経験していなかった。
- ・ 中学校教育実習では、指導経験とともに授業観察や授業反省会への参加頻度

が多くなっていた。

2) 教育実習前後の意識の変容について

- ・ 小学校教育実習生、中学校教育実習生ともに「一人ひとりの子ども把握」「運動の苦手な子どもへの配慮」への心配が実習前後とも高くなっていた。
- ・ 小学校教育実習では、「安全」「運動の苦手な子への配慮」「一人ひとりの子ども把握」「子ども同士の協力的関係」「いろいろな子どものニーズ」の項目で実習前後に有意差がみられ、どの項目も子どもに関連した内容であった。
- ・ 中学校教育実習では、実習後に有意に心配が増した項目はみられなかった。

3) 教育実習生からみた教員養成での指導の必要性

- ・ 小学校教育実習生、中学校教育実習生ともに「運動のつまずきやできない子の指導」「多くの子どもの把握方法」「安全面の確保」「主体的な学習の進め方」の必要性が高くなっていた。
- ・ 小学校教育実習生からは、「体育やスポーツに関する専門的な知識」「運動の模範や見本を示せる実技力」の必要性が低くなっていた。
- ・ 中学校教育実習生からは、「運動の模範や見本を示せる実技力」「運動技能に関する知識」「体育やスポーツに関する専門的な知識」の必要性が高くなっていた。

これらの結果を踏まえ、実践的力量を形成する体育教師プログラム開発にむけた2つの課題を指摘しておきたい。

1つは、「一人ひとりの子ども把握」「運動の苦手な子どもへの配慮」「子ども同士の協力的関係」「いろいろな子どものニーズ」などの項目にみられる子ども理解、子どもとのコミュニケーション、個に応じた指導といった子どもとの対応に関する実践的力量の形成である。大学での教員養成プログラムで身につけた技能や知識を実際の子どものようにどう対応させるのかが教育実習生の新たな課題として生じていた。このことに関連して、2004年3月に日本教育大学協会から「教員養成の『モデル・コア・カリキュラム』の検討」が示され、そこでは大学1年生から4年生まで、「教育実践体験」「実践開発実習」「教育実習」といった学校体験活動と大学の授業を連携させたカリキュラムが提案されている。子どもと直接ふれあう実践経験や臨床経験を大切にしながら、3年次に実施される教育実習を核に教育体験活動や大学授業との連携を具体化させた教員養成カリキュラムの体系化が問われている。

そして、もう1つは、「運動の模範や見本を示せる実技力」「運動技能に関する知識」「体育やスポーツに関する専門的な知識」などの項目にみられた体育教師としての専門性の問題である。体育教師教育プログラムに対して、小学校教育実習生からは実技力や体育の専門的知識の指導をあまり求めていな

い実態が確認できた。この理由はいくつか考えられるが、例えば、小学校教育実習での少ない実践経験からは、体育の専門性よりもいかに効率よく授業を展開させるかといったマネジメントに関する課題や子どもをどう掌握し、一人ひとりの子どもにどう対応するかといった子ども理解や個への対応に関する課題を強く抱いたのかもしれない。あるいは、大学の講義や実技の授業が、教育実習の指導で必要とされる知識や技能に本当に適合していたのかといった問題も考えられる。他方、中学校教育実習生からは小学校教育実習生とは逆に実技力や体育の専門的知識の指導の必要性が強く求められていた。今日、子どもたちの体力不足や運動能力の低下が問題になっているが、これらの諸問題に対応するのは体育教師としての確かな力量を養成段階から育んでいくことであろう。養成段階で身につけなければならない最低限の実践的力量を明らかにするとともに、それらを確実に身につけることができる体育教師教育プログラムの改善が求められる。

注

注1) 小学校教育実習の調査では、次の大学から回答を得られた。(五十音順)

愛媛大学、岡山大学、島根大学、鳴門教育大学、広島大学、安田女子大学、広島女子大学

注2) 中学校教育実習の調査では、次の大学から回答を得られた。(五十音順)

愛媛大学、香川大学、高知大学、滋賀大学、島根大学、鳴門教育大学、広島大学

文献

木原成一郎・松田泰定(2002)「教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究」『学校教育実践学研究』第8巻, pp.1-8.

木原成一郎・重見典孝・松田泰定(2004)「教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究(その2)」『学校教育実践学研究』第10巻, pp.1-10.